研究業績

当院の高齢化社会に対する活動

厚生連高岡病院 看護部
平野 晴美，出口 慶子

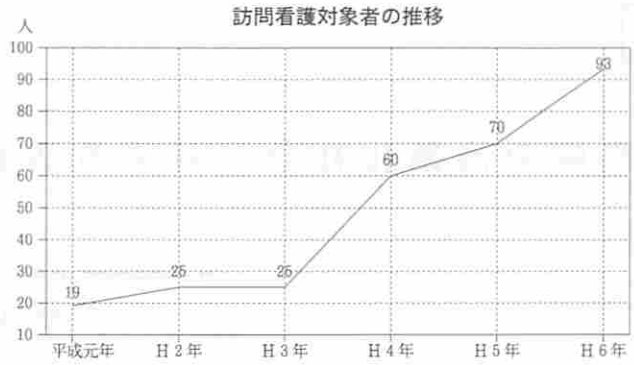
現在わが国は，少子高齢化社会を迎え，その上，疾病構造の変化，医療の専門化，高度化，保健医療を巡る環境の変化等々，21世紀にむけて，人々の健康を守り，育む事に，より一層の力を入れて行かなければならない時代になってきている。今回，当院の訪問看護の現状と，ＪＡホームヘルパーの実習，病院ボランティアの受入れ等を報告し，当院の活動内容をご理解いただきたい。

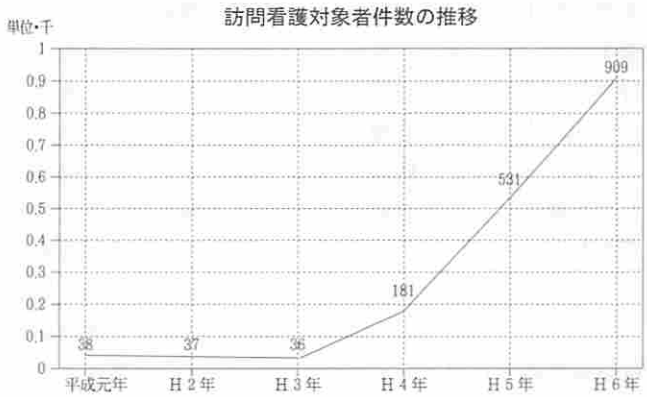
1．訪問看護

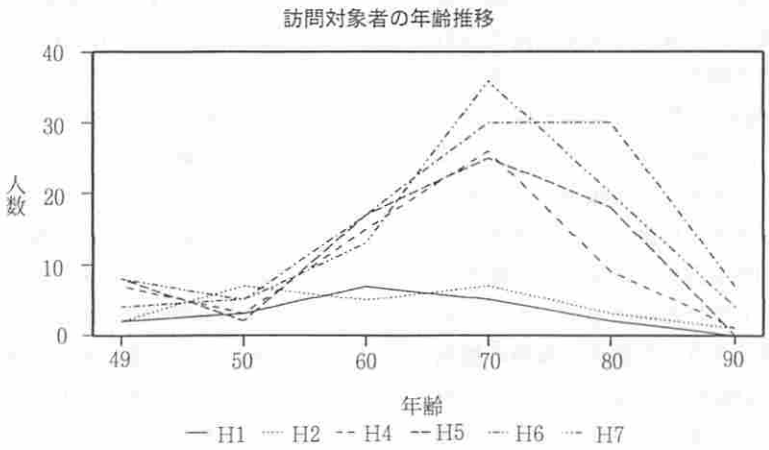
昭和62年度より当院退院患者を対象として病棟看護婦がボランティア的に活動していましたが，平成元年保健相談室の開設と同時に訪問看護活動は保健相談室の１つの活動として位置付けられました。平成２年には訪問看護委員会が発足し，平成５年実績が認められて，訪問看護車の購入，ユニホームも新しくなり，現在では訪問件数１日平均６件，月平均100件を越える活動となっています。訪問対象者の数は年々増加し，年齢別にみても高齢者が多くなってきています。又介護者の年齢も70才代が30％を占めています。高齢者が高齢者の介護をしているわけです。そのために訪問回数も多くなり，介護者の精神的援助も必要となり，訪問時間も長くならざるを得ないという状況が生まれています。主な介護者は配偶者が63.1％であることは，老人の２人暮らしが多くなったと推察できますし，嫁の介護が19.4％と増えた原因を考えてみますと，嫁も高齢となり勤めを止めている事と，訪問看護対象者の主な疾病が大きく関係してきます。癌の患者即ちターミナル期を自宅で過ごしたいという患者の希望を受入れ，在宅で家族と共に過ごすという患者のＱＯＬに目が向けられ，嫁も協力体制をとると言う事と在宅介護に対する人々の考え方に変化が表れ定着しつつあると考えます。今後も患者の希望を可能な限り受入れ地域の人達の要求に応えて行きたいと思います。そのためには，訪問対象者を状態により病院に必ず収容出来る体制作りと，医師との同行訪問が出来るという体制が大きな課題となります。

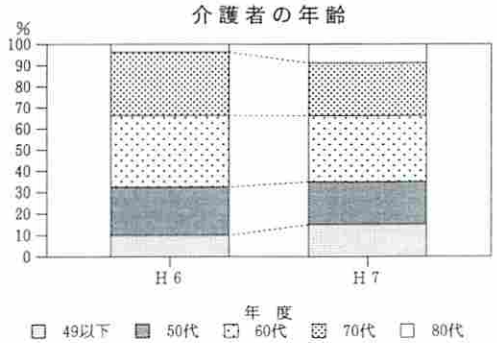
2．ホームヘルパー実習

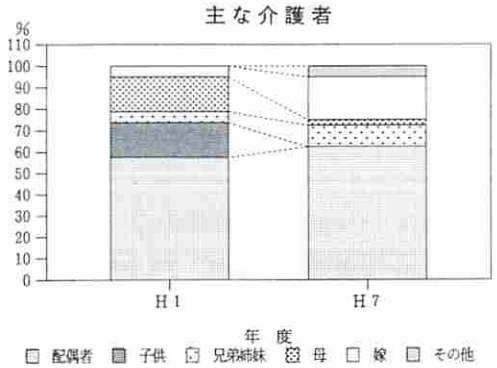
平成12年の老人人口約2130万人，高齢化のピークを迎える平成33年を目途として厚生省，労働省の提案したゴールドプランにのっとり，平成３年に高齢者対策リーダー養成研修と称して３級のホームヘルパーの養成を皮切りに，平成５年に２級，７年に１級の養成を実施され，当院ではその実習を受け入れてきています。毎日の実習記録を書きながら，高齢者の気持ちを学び，介護の実技に熱心に取り組まれる姿勢は我々看護者に取ってもその精神には学ぶべきものが多くあります。ホームヘルパー資格を取得された方々のなかには，自分の仕事を持ちながら将来役立てたいと考えて

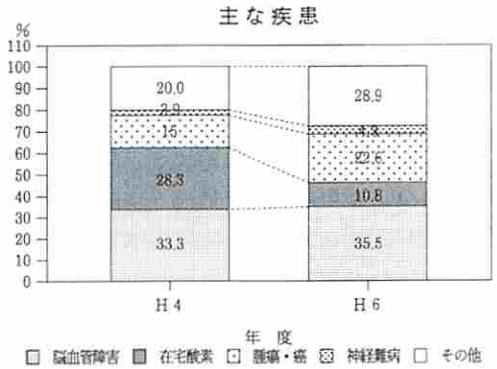

訪問看護対象者の推移
人
100
90
80
70
60
50
40
30
20
10
19
25
25
60
70
93
平成元年
H 2 年
H 3 年
H 4 年
H 5 年
H 6 年


訪問看護対象者件数の推移
単位・千
1
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
0.3
0.2
0.1
0
38
37
36
181
531
909
平成元年
H 2 年
H 3 年
H 4 年
H 5 年
H 6 年


訪問対象者の年齢推移
40
30
20
10
0
人数
49
50
60
70
80
90
年齢
H1
H2
H4
H5
H6
H7







参加された方や，自分自身が高齢者の仲間入りしたとき自分で出来る事を他の人にして差し上げたい等，高齢者の方々の介護，お世話をしたいという熱意に圧倒されながら優秀なホームヘルパーとして育たれんことを願って，実習を受け入れております。

3．病院ボランティア

高齢者対策リーダー研修の３級を終えられたＪＡ高岡の所属の方々が「萌ぎの会」を結成され，病院ボランティアの活動をしたいという申し入れがありました。それを受けて，平成５年４月より毎週月曜日，外来に於ける患者さんの案内，誘導，材料づくり等外来業務の繁雑な部分を受け持っていただく事から始めて，９月から７名となり現在では24名の方にボランティアとして活動していただいております。２級の資格をお持ちの方には平成６年より病棟へ，比較的老人の多い内科・神経内科の混合病棟と脳神経外科病棟で，患者さんの話し相手，食事の世話，移送の介助，特浴や清拭の世話等に参加していただき，外来の活動としては，玄関前にての案内，車椅子の患者さんの援助，伝票・材料作りにご協力をいただいております。病院関係者とボランティアの方々とは年１回の反省会を持ち，今後の方針，不都合点など意見交換をしております。活動に対する感謝の気持ちとして，「ボランティアのあしあと」というボランティアノートを作成し出席印を押し，今年度は年６回以上になると当院の検診を無料で受けていただき，健康で活動が続けられますように考えております。病院ボランティアの特色は自発性と無償性にあるといわれていますが感謝の気持ちをあらわしたいとの事で実施されます。患者さんからはピンクの方として慕われ病院としても深く感謝しています。今後の課題としてはこの病院ボランティアが病棟の範囲を広げる事，在宅の患者訪問ボランティアにまで広げることが出来たらと願うと同時に，一般のボランティアをも受け入れて行けるように，ボランティアコーディネーターを置けたらと考えたりもしています。そして医療の現場で働く者として，ボランティアの活動のみを期待するのではなく，活動そのものの意義を理解して，病院の活性化に繋げていけたらと思いますし，職員全体が理解を深め定着して，地域社会の中で信頼関係を結び相互に成長して行けたらと考えます。